
時の国 オーリス

春日ナオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の国 オーリス

【Nコード】

N6262X

【作者名】

春日ナオ

【あらすじ】

溝口茜は何かに導かれ、辿り着いた時の止まった神に愛されし国オーリス。

そこで出会う漆黒の神官ノクターンと時を進める術を探することになるのだった。

目覚め（前書き）

トリップファンタジーです。

目覚め

草のにおいがする。

溝口茜はそう感じながら眠りから目覚めた。

が、目を開けてまず飛び込んできたのは真っ青な空。

眠気が一気に吹き飛び、茜は慌てて体を起こし周りを見る。

茜が眠っていたのはどうやら周りを森に囲まれた草原であった。

「…ここ、何処？」

当たり前な疑問を口にしつつ、立ち上がる。そして迷いもなく西に広がる森へ向かって歩き始めた。

茜は戸惑う。体が何かに導かれるように勝手に動くのだ。

「…はあ、まあいいか」

考えてもしょうがない。それにこの状況が打破できるなら行動した方がいいと判断したのだった。

ひたすら森を歩く。どれぐらい歩いたのかわからない。

だがいつの間にか日が傾いていた。

「まずいな…」

現代っ子の茜だが森を夜に歩くのは危険だということぐらいは知っている。

「せめて人に会いたいな…」

野宿が出来る能力を茜は持っていない。なんとしても人に会いた

い、そう思った茜は早歩きで移動する。

「!?!」

いきなり空が明るくなった。

茜は驚き足を止め、空を見上げた。

「…何で」

真っ青な空が広がっている。ついさっきまで日が傾き、赤みがかっていた空が。

茜は1歩後ろに下がる。

「!?!?!」

すると今度は空が青から赤へ変化した。

茜は驚き目を見開く。

「…どうなってんの」

茜はしばし、呆然としていたがため息をつくと再び歩き始めた。再び空が変化し青に変わった。

暗くなる不安がなくなった方がましであろうという考えであった。

しばらく歩いていたらうちに茜は違和感を感じていた。

歩いていくうちにその違和感を感じていた理由に気がついた。

「音が、ない…」

空が赤い時は心地よい風によって木々が揺れ、音があふれていた。しかし空が青くなってから全く音がない。風が吹いていない。

茜は不安になる。心なしかさらに早足になる。

早く人に会いたい。

早く自分だけしかないこの場所から逃れたい。

その一心でひたすら歩いた。

どれぐらい歩いたのだろう。

ぼんやりと茜は考えた。

かなりの時間が経っているはずなのに空は未だに青い。それを見て茜はぼんやりと思う。

まるで時間が止まっているようだ。

異変、そして出会い

ひたすら歩き、ふと前方に大きな門が見えた。茜は駆け出した。疲れも忘れていた。

門はしっかりと閉じられていた。茜は閉じている門をドンドンと叩く。

「すみません、開けてください!!!」

大声を出して反応を待つ。しかししばらく待ってみても返答はない。開けてもらうことを諦め、他に入口がないかとキョロキョロと周りを見渡す。が、この門以外に城壁の中に入る方法はないようであった。

茜は門を背にして座り込んだ。そしてため息をつく。

「なんでこんなことになったのよ…」

少し涙が滲んできた。

「開けてくれてもいいじゃん…」

早く不安を取り除きたかった。

ゴゴゴゴゴ…。

不意に地が揺れた。慌てて茜は立ち上がる。そして振り返ると、閉ざされていた門が確実に開き始めた。

やがて完全に開いた。茜は躊躇なく門をくぐり、中へと入った。未だ森が続く。人の気配はない。茜は諦めず、どんどん歩いて行った。

すると建物が見えてきた。どうやら町にたどりついたようだった。

「!!!」

町に入った瞬間茜は足を止め、その光景を見た。

楽しそうな人々。舞う花びら。どうやら祭のようだった。人がいたことは嬉しい。が人々は皆、動かない。人々だけではない。ものも動かない。やはりまるで時が止まってようだった。

「何、これ…」

どんどんと立派な城のほうへと歩いて行く。城に近づくにつれ人もどんどん多くなってきた。がやはり皆動かない。茜は次第に自分だけが異常なのでは？と考え始めた。

思考がどんどんマイナスへと向く。一段と人が多い広場にたどりついた。ここから城の大きなバルコニーがよく見える。バルコニーから幸せそうに手を振っている王らしき人物。その後ろに控えめな女性がたたずんでいた。その妻であろうか。

茜はぼんやりとそれを見つめていたが、今度は城の中を目指した。茜は戸惑いを隠せない。今、はつきりとわかったのだ。やはり何かに導かれていると。

この国のことを全く茜は知らない。なのに住んでいるかのように道を歩むのだ。現に城内もまるで知っているかのように進んでいる。

城の奥の奥へと進んでいくと広い空間に出た。そこには目を見張るほど大きな時計が中心に置かれていた。

「…大きな時計」

茜は目の前にある時計に見惚れた。そして手を無意識に伸ばす。触るな」

空間に声が響いた。茜は振り返る。

そこには漆黒の青年がいた。

漆黒の衣装、漆黒の髪、漆黒の目…。

茜は思わず息をのんだ。

「お前、何故ここに…。いや何故動いている」

青年は茜のそばまで来ると、茜を見下ろした。

茜は青年の首を上げ、青年を見る。

「私、起きたら…草原にいて…」

茜は自分が目覚めてからここにたどりつくまでを必死に青年に伝えた。青年は目を閉じながら茜の話を聞いていた。

茜の話が終わるとゆっくりと目を開け、茜を見据えた。

「お前、異世界からきたんだな」

「異…世界…？」

「そうだ。まず、この国の時は止まっている。私以外動くものは私の知りうる限り誰もいない」

「時が…」

自分の置かれた状況を受け止めるので精一杯だが茜は考える。そして青年にその疑問をぶつけた。

「あの、なんで時が止まっているのにあなたは動いているんですか？」

青年は茜の質問に頷く。

「私は『闇』を司る神官だからな。おそらくそれが原因だ」

茜は首をかしげた。青年は「ああ」と呟くと納得したように頷いた。

「お前は何も知らないのだな。これも何かの縁。長くなるが私の話を聞くか？」

「…ハイ」

茜は何故か聞かなければならない、そう感じていた。

茜が頷くのをみると青年は立ち上がった。

「ここではゆっくりと話せない。我が家『黒き箱』に移動してもらう。私の名はノクターン・ワイズマツトだ。お前は」

「溝口茜です」

「アカネ、ではこちらへ」

ノクターンの案内で茜は『黒き箱』に移動したのだった。

『黒き箱』

ノクターンに案内され、茜は巨大な時計のある空間から少し歩いたところにある黒い神殿『黒き箱』にいた。

神殿内は4つの部屋から構成されており、そのうちの1つがノクターンの私室になっていた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

ノクターンからコップを受け取り、茜はそれを飲んだ。

「…おいしい」

「それはミャーニヤという花から作られた茶だ」

ノクターンは茜の向かい座った。

「長くなるがいいか」

「はい、大丈夫です」

茜が頷くを見るとノクターンは話し始めた。

「この世界には5つの大陸から成り立ち、それらの大陸に数多の国が存在している。ここオーリスはサイトリア大陸の中心都市として栄えている。」

「この国はオーリスというんですね」

「ああ。我が国オーリスは特殊な国で、特別工業、農業が盛んというわけではない。されどこの国は大陸の…いやこの世界の中心都市といえる。ここは神に愛された地なんだ」

「神に、愛される…？」

茜はその意味がわからず首をかしげた。

「そうだ神に愛されし地オーリス。お前はあの『時計』を見ただろ

う？あれはこの国にのみ許された証だ」

「何を許されたんですか？」

「『時』を司ることだ。この世界で『時』は神が操る神聖なもの。その象徴である『時計』は古来より人間が手にしてはいけないもの。しかしこの国オーリスは、神により『時計』の保持を許された唯一の国だ」

ノクターンはそう言つてため息をつく。

「しかしどうやらこの国は神に見放されたようだな…。時が止まつてしまった。やがてこの世界の時は全て止まってしまうだろう」

「そんな…」

茜はその場の空気が重くなるのを感じた。そして慌てて気を取り直すように言った。

「あの！貴方は何故動いているのですか？」

「ああ、そうだったな。…私は『闇』を司る神官だと言つたのは覚えてるか？」

茜は頷く。

「この国には『時』を守るために『光』と『闇』の対称の力を持つ神官が存在する。私は『闇』の神官だ。『闇』の象徴は”黒”、“過去”、“拒絶”、“死”だ。おそらく私のこれらの象徴が何らかの原因で時の干渉を受けなかったようだ」

ノクターンはそこで言葉を切ると茜を見つめた。

「今度は私が問おう。」

何故お前はこの世界に来た？」

「私は…」

何故ここにいるのだろうか？

ここに来る前は何をしていた？

轟音。悲鳴。私を呼ぶ声――――？
暗くて、怖くて、何かが崩れるような感覚。

茜は不意に頭痛が起き、頭を押さえた。

あれ？待って。私、あの時――――！！

【まだ思い出すのは早い】

不意に頭の中に響いた声。それと同時に頭痛が治まった。

「あ、れ…？」

目の前には心配そうな顔をしたノクターン。

こつちが、現実？

「すまない。無理をさせたようだな」

「いえ…。大丈夫です。何故か思い出せないようです」

茜は震える右手を左手でギュツと握る。

自分が何故ここにいるのか。

茜はそのことが知りたいが、何故か知るのがとても怖くなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6262x/>

時の国 オーリス

2011年11月23日00時54分発行